

『主は最善を為してください』

聖書 テサロニケの信徒への手紙—4章13節～5章11節

讃美歌 454 385 518 579 29

説教 森田幸男牧師

本日はこのように新会堂における初めての召天者記念の礼拝を守ることができ嬉しく思います。この召天者記念礼拝において、日頃は他の教会で礼拝を守られている方々、また御遺族の方々と顔を合わせて共に礼拝を守ることができますことを本当に嬉しく思います。

お顔を見ることを通して、天に召された方々の顔が同時に浮かんでまいります。そしてその一人一人がこの地上の歩みをどのようにされたのか、私たちに何を残してくれたのか、そのことを改めて思い起こします。

今年、大阪北教会は創立122周年ということで、5月の第一日曜日5月6日に創立記念礼拝を守りました。その時に、この大阪北教会、そして大阪南吹田教会が神崎川の所にありますけれども、この二つの教会を興されたアレキサンダー宣教師の曾孫さんのジョアンナ・シェルトンさんをアメリカからお招きして、共に礼拝を守ることができました。

つい数日前にジョアンナ・シェルトンさんからメールを頂いたのでありますけれども、そのメールには、「私はわたしの教会のアクティブ・メンバーになりました」と、こういうふうな一節がありました。アレキサンダー宣教師の曾孫さんであります、そういう方がおられることも去年までは私たちも知らなかったのですけれども、教会に連なっておられるに違いないと想像していたわけですが、この方は50代半ばのご婦人で、モンタナにおいて政治家としても、学者としても非常にレベルの高い方であって、今もその働きをしておられるのですが、必ずしも教会にはつながっておられなかったようであります。ところが去年、大阪南吹田教会が120周年の礼拝を守られ、そして私たちが122周年を今年守った機会に日本に來られまして、「その時の経験がわたしの霊的な方向付けに非常に影響がありました」と、こういう文章もありました。その前のメールでは「わたしは自分の教会を見つけました」とありましたが、今回のメールには「私はその教会のアクティブな、生きたメンバーになりました。それは皆さんのおかげです」とこういうふうを書いてこられたのです。数日前のことです。そして、「わたしにとっては曾祖父さんのアレキサンダー宣教師、そして神様、そして教会が本当に生きたリアルなものになりました」とそういうふうなことも、前の前のメールに書いておられました。ジョアンナ・シェルトンさんは曾祖父さんの信仰を日本に來られて知らされ、その信仰に自分が戻ることが出来た。そういうことであります。これは私たちにとっても非常に嬉しいことであります。

そのようにご遺族の皆さんのお顔を見ることを通して、私たちは本当に信仰の豊かな遺

産を継ぐ者とされているのだということを感じます。その機会が今日のこの召天者記念礼拝であります。

ところで只今テサロニケの信徒への手紙の4章の13節以下が読まれました。新約聖書には27の文書があります。そして旧約聖書には39の文書があります。それでこれを“ $3 \times 9 = 27$ ”と覚えると覚えやすいのですが、66の大小様々な文書の集まりが聖書であります。新約聖書27文書のうち、13の手紙、これはパウロによるものとなっておりますが、研究の結果、実際は13の内7つがパウロの真筆、パウロさんが本当に書いたもの、けれどもあとの6つは、パウロの信仰を継いだ別の人がその続きとして書いたものであると言われているわけであります。そしてその7つの内で、パウロが書いたもので一番古いのがこのテサロニケの信徒への手紙(一)であります。(二)は別の人の手になるものだろうと言われるのであります。

そのようなことは兎も角として、このテサロニケの信徒への手紙一が今私たちが読むことができるパウロが書き残したものの中で一番古いものなのです。この後に、ガラテヤ書とかコリント書とか、或いはロマ書とかフィリピへの手紙とか、そういうものが書かれていくのですが、パウロの手紙の中で一番古いこの手紙は紀元50年頃のものと考えられます。

パウロと言う人の年齢は、西暦とほぼ同じと言っていいと思います。50年頃に書いたということは、彼が50歳ごろと言っていいと思いますね。イエス様が亡くなられた直後、彼は回心してクリスチャンになりました。大体紀元30年頃で、それから20年ぐら経って書いた手紙がこのテサロニケの信徒への手紙ということになります。

20年というと、若い人はまだまだ長いと思われるかもしれませんが、歳を経ると20年というのはあっという間に過ぎる年数でもあります。そしてパウロはキリストに捉えられて、回心してクリスチャンになりました。このテサロニケの信徒への手紙は僅か5章ですので、15分か20分あれば通読できます。そしてそこには最初期の信仰の熱気のようなものを感じることができますので、是非通読なさることをお勧めしたいと思います。

ここにある信仰、思想の特徴というのは、主イエス・キリストの復活の事実、それから主イエス・キリストの再臨のこと、そして死んだ者が復活すること、そして、キリストによる最後の審判、そういうことがより初期のものに共通しているものであります。最後の時というか、主の再来の時が本当に近い。その日に向かって、「主の日」という表現が今日のところにもありましたが、「主の日が、盗人が突然来るように来る」その主の日の近さというものを本当に感じながら日々を生きていた。そういうことも窺える手紙であります。しかしそれから千九百数十年を経て私たちは今ここにいるわけであります。再臨はどうなったであろうかというふうなことを問うこともできるわけであります。

ところで、今日の4章の13節以下でありますけれども、ここにおいてパウロは、「兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わた

したちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいませ。」このように先に召された者たちについてパウロは、「眠りについた人たち」と、こういうふうに繰り返し言うております。16 節では、「キリストに結ばれて死んだ人たち」という表現もありますが、パウロは死ぬことを「眠りにつく」とこういうふうに言っているわけでありませう。

あのマルタとマリアの兄弟にラザロがいましたけれども、危篤状態になった時に、マルタとマリアは、イエス様は遠くにおられましたけれども、弟が死なないうちに早く来てくださいますと使いを遣りましたけれども、イエス様はラザロたちを本当に愛しておられたのにすぐにはそれに応じられませんでした。そしてようやく来られたら、ラザロは既に死んで4日も経っていたのです。そういう話がありますが、その時イエス様は、「ラザロは死んだのではない。眠っているのだ」と、こういうふうにおっしゃいました。そして「起こしに行こう」と言われて、死んで既に4日経っているラザロの墓に向かって、「ラザロよ、出て来なさい」と、丁度眠っている者と呼ばれ起こすように呼びかけられますと、ラザロが墓から出てきたという話がヨハネの福音書 11 章に出ております。

そのように、死ぬことを眠りにつくというふうにはイエス様もお考えになり、そして今日の箇所においてパウロもそういうふうには表現しているわけでありませう。ここに復活の信仰があります。「永遠の眠り」という表現もありますけれども、パウロが言う「眠り」は永遠の眠りではありませう。ひと時の眠りでありませう。その後、主の呼びかけによって目を覚ますわけでありませう。それがいつの事なのか、それはパウロもここに明記しないのでありませう。

この時間について考える場合に、聖書の時間の考え方、今申しましたように、初代のクリスチャンたちは主の再臨の時は本当に近いと信じて疑いませうませんでした。そこに迫っているという感じで日々を過ごしていたわけでありませう。それから千九百数十年経ったので、遠のいたとこういうふうには言うこともできますけれども、ペトロの書いた手紙が、今日のテサロニケ書のすぐ後にありますけれども、そのペトロの第二の手紙の3章の8節には、「主(神、イエス・キリスト)にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」と、こういう表現があります。少し分かるような、或いは分からないような感じでもありますけれども、千年と言えば、とても長い気がしましませう。けれどもそれは神にあっては、キリストにあっては、一日のようなものなのだ。一日ならば明日のことですから、本当に間近なのでありませう。でもそれは普通の感覚で言ったら千年の長さでもあるのですが、千年の長さがあるろうが、二千年の長さがあるろうが、何万年の長さがあるろうが、それが主にあっては本当に一日であるという感覚、これが信仰者の時の感覚だと思ひます。

神の審判が千年後と言ったら、まだ千年の余裕があるわけですから、もうちょっと暫くは自分なりに生きて、勿論千年も生きる人はいないわけですが、近づいたら少し身を正してというふうなことになるかもしれませうが、そのときが一日ならばそんなことは言て

おられないわけです。間に合いません。しかし千年を一日のように生きるということは、結局、生ける神様の前に一日一日、刻々生きるということを言っているのです。

そのように、「終りの近さ」とは「神様の近さ」だと、そう言い換えてもよいと思います。いずれにしても、死ぬことを眠りにつくと言うことは、目覚めがあるということです。神によって目を覚まされるのだ。そういう意識であります。

先週も鳴門にある大塚国際美術館のミケランジェロのあのシスティーナ礼拝堂の壁画、天井画の話をしました。今日はそれとは違って別のお話をしたいと思うのですが。あの壮大な絵はいずれにしても聖書を本当に読まなければ描けないのです。一枚の絵でも構想が固まらないと描けないのです。ところがあの十数メートルの幅、数十メートルの奥行き、二十数メートルの高さ、これ全体に聖書の世界を一人で、4年の歳月で描いたというので、大変なことなんです。その話は今日は致しませんが、その同じ階に「フェルメールの小部屋」というのがあって、フェルメールのものが数点集められております。

その部屋を出たすぐ右手にエル・グレコのコーナーがあるのです。この前行った時、ガイドさんはそのエル・グレコを飛ばしたのですが、フェルメールの部屋から出た所に、高さ3m、幅2mぐらいの「三位一体」というテーマのものが架かっていました。どういう絵かと注意しますと、十字架から降ろされたイエス様が天上に迎えらる絵です。その構図はマリアさんがイエス様を抱いている、あの「ピエタ」というあの構図の絵です。そしてその上に鳩が描いてあるのです。鳩は聖霊のシンボルですから鳩、それで「三位一体の神」というと父なる神様がおられないといけなわけですが、その十字架から降ろされてたイエス様を抱いているのは、グレコの絵ではマリアではなくて、父なる神様なのです。それがエル・グレコの「三位一体」なのです。今までマリアに抱かれるイエス像、いわゆる「ピエタ」ではミケランジェロの物が一番有名で、サン・ピエトロ大聖堂にあるということですが、「父なる神に抱かれる十字架から降ろされたイエス様」というのには、今回初めて出会って、最初見た時はこれは何だと思ったのですが、今日の聖書の箇所を読みながら、エル・グレコの着想が分かったように思いました。十字架から降ろされてマリアさんに抱かれているイエス様の姿は、これは我々もその時そこにいれば見ることのできた姿ですね。ところがエル・グレコはこのことと、十字架において父なる神から託されたすべての務めを果たし終えられたイエス様は、十字架上でもう「すべては終わった」或いは、「すべてを成し遂げた」という意味でもありますけれども、そう言われて息を引き取られた、という記事がヨハネ福音書にあります。その務めを全うされたイエス様を父なる神が天に迎えておられる。わたしは、地上と天上とは同時進行なのだと思いました。こちらで見えるのは十字架で傷ついたイエス様をマリアが抱いている。けれどもその時、同時に父なる神が、『わたしがあなたに求めたすべてのことを、あなたは成し遂げてくれた。少し休みなさい』という感じで、持てる力を全て注ぎだされた眠れるイエス様を父なる神様が抱いておられる。だから、エル・グレコの絵では、死んだイエス・キリストではなく、少し休むために

眠りについた神の子イエス」という感じなのです。今回それを見つけたのです。主観的な解釈ですが、本当に”発見の喜び“というのはこういうものかもしれません。ああ、そういうことなんだ。地上での死に方は、必ずしも天寿を全うするというようにはいきません。イエス様の十字架が典型ですから、あのような死に方もあるわけです。けれども私たちは同時に父なる神に迎えられる。その胸に抱かれることと、地上の死とが同時進行なのだという、そういう死生観というのが、このパウロの「すでに眠りについた人たち」という表現の中に込められていることを、このエル・グレコの「三位一体」という絵を見て、そしてこの聖書を読んで、「ああ、そういうことなんだ」と思いました。私たちのこの地上の歩みにはいろんな試練があります。生きている限り試練があります。困難があります。耐え難い辛いこともあります。けれどもそのすべてが三位一体なる神の御計画と御導きの中で、本当にその一つ一つのことが起きている。起こされているわけです。

ですから、今日の箇所を読む場合でも、そういう神の御目のもとにあるこの私、しかもこの私は、今日の5章の9節を見ますと、「神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです」とあります。これが神様の御心なのです。そして10節には、「主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても(ここに地上に生きているということ)眠っていても(死んで天に召されるということ)、主と共に生きるようになるためです」とあります。ですから、この地上の歩みにおいても、そして我らが死んだ後も、主と共に生きる。この主と、神と共なる命は決して崩れないわけです。

この間から日曜学校を9時半から30分しているのですが、一曲目はいろんな讃美歌を歌うのですが、二曲目は定番で、日曜学校のテーマソング「主われを愛す」を歌うのです。この「讃美歌21」では484番、これをいつも歌うのです。口語訳の歌詞もこの讃美歌21には出ていますが、上の方の昔から歌っている讃美歌を歌うのです。この歌はやはり良くできています。

1、 主われを愛す、主は強ければ、われ弱くとも 恐れはあらず。

(くりかえし)わが主イエス、わが主イエス、わが主イエス、われを愛す。

2、 わが罪のため さかえをすてて、 天よりくだり 十字架につけり。

3、 みくにの門を ひらきてわれを 招きたまえり、いさみて昇らん。

4、 わが君イエスよ、われをきよめて、よきはたらきを なさしめたまえ。

3番までは順序がわかりますが、4番が問題です。私は小さい頃からこの歌を歌ってしまして3番と4番の歌詞は逆ではないかとずーっと思っていたのです。イエス様のことが分かって信じて、わたしに良き働きを為させて下さい。そして地上の歩みが終わったら、天に迎えてくださいというので、筋が通ると思ったのですけれども、3番に「みくにの門」が来て、4番に「われをきよめてください」とあるのをずーっとわたしは謎のように思っていたのです。ところが、この順番でいいのだと、今は思います。私たちはやはりこの後

死んで眠りについて、やがて目覚めるわけですが、そういう経過を通して、清められて、やはり私たちは、自分から離れた時に、はっきり見えるものがあるのです。何事でも自分にこだわっていると、物事はよく見えません。ほんの僅かな部分しか見えないのです。ほんの僅かなことしか見えないということは、正しく見る事が出来ないということです。全体を見て、部分を見たら、その部分がどういう位置づけになるかというのが判断できますね。しかし小さなことしか見ていないと、これが良いものやら悪いものやら、どういう位置になるかというのが分からないのです。ところが全体の中で位置付けたら、初めてああだこうだというのが分かりますね。そういう澄んだ目は、やはり悲しいかな、地上の歩みの中では十分に持つことができません。この体から解かれた時に、この自分の体から離れた時に私たちは見えるようになりますね。その日に、私たちの理解は本当に深まり、高まり、改まる。そういうプロセスが、「わが君イエスよ、われをきよめて下さい」という祈りになると思うのです。そしてその後、「善き働きをなさしめたまえ」と続きますね。天に召されてすることがないなんていうのなら、皆さん天国へ行きたいと思いませんか？ そんな所へは行きたくないですね。時間が十分あるのに、する事が何もないなんて、退屈で、暇でしようがない。そんな状態が一番惨めですね。

ところが、死んだイエス様、眠りについたイエス様は、その後目覚めて、そして今も私たちのために、変わらない一層の働きを続けていてくださる。そのイエス・キリストにパウロは捕らえられたのです。私たちも捕らえられたのです。「主に結ばれる」というのはそういうことであります。

10 節に、「主はわたしたちのために死なれました」と、こう書いてあるのです。何度聞いたか知れません。何十回、何百回、何千回、私たちは聞いたかしの定形の言葉です。イエス・キリストはわたしたちのために死なれました。この一句が含むその許容量、それは無限です。宇宙大です。そのような神様の限りない御愛の中に導きいられ、召された人も主イエスに結ばれているし、私たちも結ばれている。それが私たちの今日、この日であります。

先ほどちょっと「最後の審判」ということを言いました。ミケランジェロのシステーナ礼拝堂の正面の絵も「最後の審判」というのがテーマですが、そして天国に入る者、地獄に落とされる者というのが正面に描かれておりますが、わたしはその構図は余り好きではないのですけれども、しかし、それは聖書に書いてあることですから、最後の審判はあるわけです。無事だ、安全だと言っているその矢先に、突然破滅が襲うのです。ですから、神を侮り、見くびるなんてことは誰にも出来ないのです。自分のしたことの報いは必ず受けるのです。それは神による裁きですから、最後の絶対の審判でありますから、これを避けることのできる人は一人もいないわけであります。

もう一度ミケランジェロの絵に触れなければなりません、けれども再臨の復活の主、審判の主キリストが中央におられて、天国、地獄の図があるのですけれども、そのキリス

トの上に大きくヨナの像が描かれているというのがメッセージなんですけれども、裁きがあります。ヨナも三日間大魚に呑み込まれて、地獄の苦しみを味わいました。けれども、そこで彼は本当に悔いたのです。すると三日の後に彼は吐き出されて岸辺に投げ出されます。それは審判を経て赦され、そして復活した者の姿とわたしには見えたのです。

ですから最後の審判はあります。けれども、9節に、「神はわたしたちを怒りに定められたのではなくて、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです」とあります。この救いが審判の上位にあるわけです。その救いのために、主イエス・キリストは私たちのために死なれたのです。そういう救いの総体をパウロは本当に、キリストが亡くなられた2、3年後、真昼に、太陽の光よりも明るい光に照らされて悟ったのです。パウロはそれを「キリストの啓示」と言ったのですけれども、今日のところでも4章15節で、「主の言葉に基づいて次のことを伝えます」と言っています。「わたしは自分の考えで言うものではありません。主から聞いたことに基づいて、わたしは皆さんに伝えるのです」と言っております。その時の事情について、パウロはガラテヤの信徒への手紙の1章11節で、「兄弟たち、あなたがたにはっきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。」こういうふうにテサロニケの信徒への手紙のあとに書いたガラテヤの教会への手紙で言っています。ですからパウロが今ここで書いているようなことは、自分で思索し、考えてという部分もありますけれども、それはもうキリストによる啓示によって光に照らされて、見えていなかったことがはっきりと見えたわけです。

神による審判はある。誰も避けることができない。けれどもそのような最後の審判は御子キリストをくださった絶対の慈悲、慈愛を持たれる神の愛による審判なのだということを、パウロは悟ったのです。キリストを賜る神の慈愛は、神の審判を包みこんで、その上位にあるわけです。だから審判がないというわけではありません。そのことを私たちは見くびることなどできないのですけれども、「主はわたしたちのために死なれました」というこの事実は、その審判を貫いて、わたし達の救いのために受当するのです。

そういうことでありまして、私たちはこの地上の歩みを許されているわけですが、この手紙の冒頭のところにこう書かれています。「パウロ、シルワノ(シラスのこと)、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ、恵みと平和が、あなたがたにあるように」と、こう記されております。

「父なる神と主イエス・キリストとに結ばれている教会」と、こういうふうに言うわけです。テサロニケの教会、そしてそれは私たちの教会にも言えることでもあるわけです。既に召された人たちは、キリストに結ばれて死んだ人たち、その人たちはキリストが死んで復活されたように、イエスを信じて眠りについた人たちも、その主イエスと一緒に導き出されます。このようにパウロは言ひまして、既に召された者も、今なおここにいる私た

ちも、本当に父なる神と主イエス・キリストに結ばれているというのです。

ジョアンナ・シェルトンさんも四代目になりますと、曾祖父さんでも歴史上の人物ということなんですね。今から百年くらい昔の人が自分の家系のたった四代前の人ですけども、ジョアンナさんにとっても歴史上の人物だったのです。私たちにとっても、アレキサンダー宣教師がこの教会を興してくださったということは百年史にも書いてある歴史の事実なんですが、アレキサンダーさんというのは遠い方のようにわたしも思っていました、ジョアンナさんに会って、「ああ、あなたを男にしたら、アレキサンダー宣教師のようになるんですね」というふうに、本当にそこにいるジョアンナさんを通してアレキサンダー宣教師を感じましたけれども、ジョアンナさんにとって本当に歴史上の人物であった曾祖父さんが何を信じて、どう生きたか、それを大阪に来られて感じた。そして、「大阪という町は天国に次いで素晴らしい町です」というふうにアレキサンダー宣教師は言っておられることをジョアンナさんから聞きました。本当に大阪を愛しておられたんですね。アレキサンダー宣教師は51歳で早く亡くなられましたけれども、友人たちから、「あんな極東に行ったから病気になって、子供も亡くすことになって・・・」と言われたのに対し、「いや、私は何度でも日本に行く」と、こういうふうに友人たちに言われたそうです。「それは私たちのために死んでくださったイエス・キリストによる福音、その祝福、これに自分はあずかった。だから、もう一度また人生を与えられたら、主と共に主が生きられたその愛を何とか自分も生きることを志して、何度でも日本に行く」とこういうふうに言われたそんな言葉もジョアンナさんからお聞きして、その志を我々のものとしなければならない。そういうことを強く感じさせられたのであります。

召された方々一人一人が生きられたその信仰、その思い、その愛を、こういう機会に私たちも新たに思い起こし、本当に身近に覚えて、これからの歩みの中で、キリストが生きられ、今も生きておられるその愛に私たちもあずかる者でありたい。そのように思う次第であります。

お祈りいたします。

慈愛に富みたもう主イエス・キリストの父なる神様。

いつも、いづくにあって、そしてまた私たちが深い淵に落ちざるを得ない者であっても、なおあなたの慈愛の光は、一秒の時も要さないで、その私たちのところに届いて来ることを覚え感謝いたします。私たちはあなたの大きな愛に包まれ、守られ、生かされておる身でありながら、自分のことのみで捉われるまことに小さい者でありますけれども、どうかこのような者を憐れんで、清めてくださって、あなたの救いの御業に少しでもあずかる者たちとしてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン